

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 久米島方言の下位区分

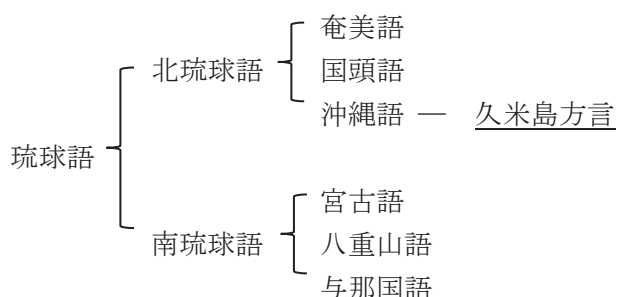
メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002450">https://doi.org/10.15084/00002450</a>

## 久米島方言の下位区分

仲原 穰\*

### 1 はじめに

久米島方言は沖縄語に属する方言の一つである<sup>1</sup>。しかし、沖縄中南部の諸方言と共通する特徴がかなりみられる。その一方で、久米島方言だけの特有の特徴も有していること、さらに久米島内に鳥島方言のように沖縄語とは異なる特徴の方言が存していることもこれまでに論じられた通りである<sup>2</sup>。



久米島方言が「久米島系統」と「その他」の系統に大別できることについては、すでに仲原 2015 で示したが、「久米島系統」の各方言（仲村渠・具志川・仲地・山里・上江洲・西銘・久間地・兼城・大田・嘉手苺・儀間・山城・島尻・比嘉・謝名堂・泊・宇根・真謝・下阿嘉・上阿嘉・比屋定・宇江城）の下位区分については論じることができなかつた。また、「その他」に分類される方言（鳥島、銭田、真我里、仲泊、大原、北原、真泊、奥武島、オーハ島）の具体的な記述がなかつたこともあり、説明が不十分であつた。

\* 琉球大学・沖縄県立芸術大学・名城大学・沖縄国際大学・沖縄大学・沖縄キリスト教短期大学 非常勤講師

- 1 2009年2月19日、ユネスコが消滅の危機に瀕する言語とした言語の一つが「沖縄語」（「沖縄中南部方言」とも称する）である。奄美語、国頭語、沖縄語は「北琉球語」、宮古語、八重山語、与那国語は「南琉球語」という。なお、これらの総称を「琉球語」または「琉球諸語」という。本稿では「琉球語」と称する。

なお、中本（1981b）や上村（1992）など、ほとんどの先行研究で「久米島方言」を「沖縄中南部方言」に分類している。

- 2 鳥島方言については、中本（1981a）、内間（1981a）、野原（1981）、野原（1982）、津波古（2001）、津波古（2009）、かりまた（2015）などの報告がある。概ね沖縄北部方言との関係を述べているが、中本（1981：13）は「f<sup>マ</sup>ini（脚全体）」で「本来『脛』を表すf<sup>マ</sup>iniが「脚全体」を表すようになってるのは奄美德之島にも見られる現象であり、鳥島方言が奄美系の一方言であることを称するものにはほかならない。」と述べている。これに対して、かりまた（2015：184）では、「内間直仁（1980）は鳥島方言と徳之島方言との関係について述べているが、母音および子音の特徴から徳之島方言との強い関係性はみいだせない。母音体系、子音体系をみると、与論方言を除く南奄美沖縄北部諸方言的である。」と否定的な見解を示している（なお、文中の内間（1980）は中本（1981）の誤りであろう）。

このほか、これまでの久米島方言に関する多くの先行研究も各方言の報告が中心であり、久米島方言の下位区分については詳らかになっていない<sup>3</sup>。

そこで本稿では、国立国語研究所の今回の久米島方言調査の4集落（西銘・儀間・比嘉・真謝）の言語資料のうち、本報告書に掲載されている「基礎語彙」と「文法」の資料を用いて久米島方言の特徴や方言間で異なる特徴について述べ、さらに先行研究のデータなどを補助的に用いることにより、久米島方言の下位区分を行いたい。

## 2 久米島方言の特徴と言語差

久米島方言は「沖縄語」に属する方言であるが、沖縄本島から約100kmも離れており、さらに人々の交流を阻む「海」に隔てられているため、「沖縄語」とは異なる特徴も持っている。

### 2. 1 久米島系統の方言の特徴

先に述べたように久米島方言と沖縄語の沖縄本島中南部方言とは音韻・文法・語彙など総合的に似た特徴を持っている。特に語彙は両者とも似た語形になることが多い。表1は本報告書の「基礎語彙」のうち、久米島方言と那覇方言<sup>4</sup>で同じ語形になるものの一部を挙げたものである（本稿では、簡易式のカタカナ音韻表記で表記する。ただし、アクセント記号は省いた）。

母音の特徴（e→i, o→u, 「す・ず・つ」→「シ・ジ・チ」, 1拍語→長音化）や子音の特徴（「き・ぎ」→「チ・ヂ」, awa→aa, 語中「り」→「イ」）に共通性があることがわかる。

---

3 久米島方言の言語差に着目したのものとして、高橋ゼミ（1991）、野原（1982）、西岡・仲原（2010）がみられる。高橋ゼミ（1991）は久米島の25地点（仲村渠・具志川・仲地・山里・久間地・西銘・上江洲・鳥島・仲泊・大田・兼城・嘉手苺・儀間・山城・島尻・善田・真我里・比嘉・謝名堂・泊・宇根・真謝・阿嘉・比屋定・宇江城）の言語地図を作成し、その分布状況から「具志川村中心部」「具志川村南部」「具志川村全体」「仲里村中心部」「仲里村全域」「久米島北部」「久米島南部」「鳥島地区」を地域的なまとまりとして示したものである。後者は久米島西部の「上江洲」と久米島東部の「真謝」、さらに系統の異なる「鳥島」の3地点の助詞を比較しながら久米島方言の助詞を概観したものである。このうち、方言差のみられる「～へ」「～で」「～も」「ばかり」に対応する助詞については14地点（具志川・仲地・上江洲・大田・嘉手苺・儀間・比嘉・島尻・謝名堂・真謝・下阿嘉・比屋定・宇江城・鳥島）の例文を挙げ、3枚の言語地図を掲載したものである。先行研究のなかで、地域性の共通性に着目したのが西岡・仲原（2010）である。久米島方言の地域差として50単語の調査を実施し、久米島内の16地点（比屋定、上阿嘉、真謝、宇根、泊、謝名堂、比嘉、儀間、嘉手苺、兼城、大田、仲泊、西銘、仲地、具志川、仲村渠）の言語地図（「鎌」「裸」「ひもじい」「行くよ」「泥棒」「土」「言う」）を示し、久米島方言内の言語差に着目し、その特徴を述べたものである。①頭化音の喪失、②ダ行音のラ行音化（r音化）、③サ行音のハ行音化（h音化）、④不完全な撥音化（古径の残存）、⑤終止形・否定形に「ン」が付かない地域、⑥長音化（長母音化）・音挿入、沖縄中南部方言ではめずらしい語形、⑦「ス」か「シ」か、などの特徴のほか、野原（1982）の地域差の資料提示、調査語彙のなかで言語差がみられた語例を示したものである。

4 那覇方言の用例は内間・野原（2006）からの引用である。

表1 久米島方言と那覇方言の共通性

語	真謝	比嘉	儀間	西銘	那覇
風(かぜ)	カジ	カジ	カジ	カジ	カジ
米(こめ)	クミ	クミ	クミ	クミ	クミ
臼(うす)	ウーシ	ウーシ	ウーシ	ウーシ	ウーシ
水(みず)	ミジ	ミジ	ミジ	ミジ	ミジ
爪(つめ)	チミ	チミ	チミ	チミ	チミ
肝(きも)	チム	チム	チム	チム	チム
麦(むぎ)	ムジ	ムジ	ムジ	ムジ	ムジ
皮(かわ)	カー	カー	カー	カー	カー
埃(ほこり)	フクイ	フクイ	フクイ	フクイ	フクイ

## 2. 2 久米島方言の特色

### (1) 語彙的特徴

一方、久米島方言には、表2に示すように沖縄中南部方言とは異なる語形になるものもいくつかみられる。

表2 久米島方言の特徴的な語彙

語	真謝	比嘉	儀間	西銘	那覇
頭(あたま)	チンブル	チンブル	チンブル	チブル	チブル
髪の毛	カーラジ(ギー)	カーラジ	カーラジ	カーラジ	カラジ
唾(つば)	トゥンペー	トゥンペー	トゥッペー	トゥッペー	チンペー
味噌(みそ)	ミス	ミス	ミス	ミス	ンース
やどかり	アマンム	アマンム	アマンム	NR	アーマン
今日(きょう)	キー	キー	キー	キー	チュー
昨日(きのう)	キヌー	キヌー	チヌー	チヌー	チヌー
ミカン	クルブ	クルブ	クルブ	クルブ	クニブ

今回調査を実施した4地点のうち、西銘方言や儀間方言のなかには那覇方言と同じ語形のものもみられる。ただし、当該方言の「髪の毛」「唾」「味噌」「やどかり」「今日」「ミカン」などは久米島特有の単語である。

「唾」の「トゥンペー」と「トゥッペー」, 「昨日」の「キヌー」と「チヌー」のように、久米島内には地域ごとに異なる語形を用いるものもあり、このように地域的な違いを示す語形をなるべく多く集めることで、どの方言とどの方言が似た特徴を持ち、人々の交流があるのかという推論を立てることが可能であり、より複合的にみることで地域間の言語差、すなわち、下位区分が可能になるのである。

(2) 文法的特徴

① 活用語尾「～ン」

久米島方言は沖縄本島中南部方言と文法的に異なるものが単語よりも多くみられる。特に注目してほしいのが、表3の「西銘（西）」の「イツ（行く）」である。客観的に述べる際に「ン」が消失するが、話し手の主観的な意思が表現される場合や終助詞が後接する場合には「ン」の消失はみられない。また、他の地域では語末の「～ン」の付いた「イチュン」「イツン」になることからわかるように、この現象は久米島全域のものではなく、西部地域の特徴である。

今回の調査資料では、儀間方言では語末「～ン」の消失の例があまりみられないが、内間（1981b: 94）では儀間方言の例として「ジー カツ（字を書く）」（原文は音声表記）のような文も挙げられている。

ちなみに、動詞だけでなく、形容詞でも語末の「ン」が消失する（表4）。なお、動詞の過去形でも表5のように過去形でも語末「ン」の消失がみられる。

表3 久米島方言の動詞の語末「ン」

共通語	うん・畑へは おれが いく。
真謝	ンー {ハタキヤ/ハタチェー} ワンガ イチュン。
比嘉	ウン ハタキ {カチェー/カイヤ} ワンガ {イツン/イツハ}。
儀間	ウン ハタケワ ワンガ イツン。
西銘	(西)ウン ハタキカチェー ワンガ イツ。 (東)ウン ハタキカイヤ ワンガ イツッサ。

表4 久米島方言の形容詞の語末「ン」

共通語	おれは きょうは いそがしい
真謝	ワノー キーヤ イツナハン。
比嘉	ワンヤ キーヤ イチナサン。
儀間	ワンヤ {キーヤ/チューヤ} イツナサン。
西銘	(西)ワノー キーヤ イツナサ。 (東) ワンネー チューヤ イツナサンロー。

表5 久米島方言の動詞・過去形の語末「ン」

共通語	おれは きのうは 新聞を よまなかつた。
真謝	ワノー キヌーヤ シンブン ユマナータン。
比嘉	ワンヤ キヌーヤ シンブン ユマナータン。
儀間	{ワンヤ / ワノー} チヌー シンブン ユマナータン《ロー》。
西銘	(西)ワンヤ チンヌーヤ シンブン {ユマンター/ユマンタン}。

## ② 「～より」

表6をみると、日本語の「より」に対応する久米島方言の語形が「ユカ」「ユカー」「ユカン」「ヨーカー」であることがわかる。これらは「よるか」「よりかは」「よりかも」からの変化とみられる。このうち、西銘方言の「ヨーカー」は沖縄北部方言との共通性も指摘されている<sup>5</sup>。野原(1982:755)によれば、西銘に隣接する上江洲でも「シシヨーカ イユガル タカサール(肉より 魚がぞ 高い)」のように「ヨーカ」を使用するようである(原文は音声表記)。

表6 久米島方言の「より」「強かった」の比較

共通語	きのうは 今日 <u>より</u> 風が <u>強かった</u> 。
真謝	キヌーヤ キー <u>ユカン</u> カジガ <u>ツーハータン</u> 。
比嘉	キヌーヤ キー { <u>ユカ</u> /ウカ} カジガ { <u>ツーサータン</u> / <u>ツーハータン</u> }。
儀間	チヌーヤ キー <u>ユカー</u> カジガ <u>ツーサッサ</u> 。
西銘	(西) チンヌーヤ キー <u>ヨーカー</u> カジヤ <u>ツーサーター</u> 。 (東) チヌーヤ <u>ツーヨーカー</u> {カジェー/カジヤ} <u>ツーサタン</u> 。

## ③ 形容詞語尾の/s/→/h/化

表6の「強かった」の部分も西銘(東)では「ツーサタン」、真謝と比嘉では「ツーハータン」を使用し、比嘉では「ツーサータン」の語形も併用されるなど、沖縄本島中南部方言の那覇方言などと同じ「～サン」語尾のほかに、方言によっては「～ハン」語尾も使用されていることがわかる。このように「～サン」と「～ハン」を併用する方言は、沖縄本島中部の石川方言、恩納方言や沖縄南部の具志頭方言と共通する特徴である。

## 3 久米島方言の下位区分

久米島には約30の集落が存在しているが、島の中央部に集落はみられない。人々が往来する際に利用しているのは久米島の1周道路である<sup>6</sup>。

5 那覇方言では「チルーヤカ ウトゥーヤ チュラサン(チルーさんよりウトゥーさんは美人だ)(内間・野原2006:282の「ヤカ」の例文より引用)のように「ヤカ」を使用する。なお、野原(1986:76)では「ヤカの出自は『よるか』だといわれる。ヤカの前の形はユカであった可能性もあるが、沖縄南部一帯はヤカが優勢であるから、首里方言とは異なり、もともとヤカであったとも考えられる。沖縄北部方言はヨーカが優勢である。少し古い首里方言のユカに繋がる形かもしれない。」と述べている。なお、同書(野原1986:14)によれば、「B よるか系」のうち、「jo:ka」には「仲宗根(今帰仁村)」、「jo:ka:」には「伊豆味(本部町)の地名が下に記されている。また、「juka:」には「真謝(久米島)」、「juka」には「首里」としている(現代首里方言では「ヤカ」を使用するが、野原(1986:78)の注13では『南島八重垣』に「今の人この語をヤカといへども、言語の道をしらべたる古老は皆ヨカといへり」とあることや『沖縄語辞典』の「juka」に「老人が言う」とあると記している。よって、この「juka」は首里方言の古形と考えてよいだろう。4

6 ただし例外もある。例えば仲地で聞き取りをしていると、山中には真謝へ向かう山道があり、仲地と真謝をたびたび往来していたという。これは門中の本家が真謝にあることから、仲地から真謝へと行く必要性があり、近道の一つとして利用されていたようである。

現在も隣り合わせの二つの集落を「ロー、ハーザー」（宇江城、比屋定）、「ウチャム、マージャ」（宇根、真謝）のように称することから、昔から隣り合う集落のうち、互いによく交流している集落という意識があるのではないだろうか。このような併称と集落との関わりについて考えるためにも、まずは久米島方言の下位区分について分析する必要がある。

### 3. 1 語彙資料にみられる地域差

ここで示す言語地図は、西岡・仲原（2010）で作成した16地点の言語地図をもととし、それに仲原の補足調査で得られた5地点のデータを加え、語形の示し方（記号や配色）を見直して再度作成したものである。地点の数は図1に示す21地点である。



図1 久米島言語地図 調査地点

#### (1) 久米島方言の多様性（「鎌」） 図2

農業が基幹産業の久米島では、農具の「鎌（かま）」は必需品であり、さらに自分では生産できない特殊な道具でもある。買い求めることによって得られる道具であるため、「もの」とともに製品名である「ことば」も広まりやすい単語でもある。そのためだろうか、広い範囲で似たことばが使用されている。

図2のように広い地域で使用される「イレーラ」は、久米島の東側半分を占め、さらに西側の一部にも勢力を広げている。沖縄本島からの移住集落といわれる銭田や真我里でも出自である那覇方言で使用される「イラナ」は使わず、周辺の集落と同じ「イレーラ」を使用している。一方、「イレーナ」は儀間・嘉手刈、「イリナ」は兼城・大田、「イラナ」は仲泊・西銘、「エレナ」や「エレラ」は仲地・具志川・仲村渠など、隣り合う集落でのみ使用される語形であり、同じ語

形を使っている集落の人々の何らかの接触（交流，売買）があったことが推察される。

### (2) 久米島北部，東部グループ（「冬瓜」「舌」「小便」「～の(は)」）図3～図6

久米島東部と中南部の方言が同じ分布になる地図がある。沖縄中南部方言の首里方言や那覇方言で「シ～」と発音される「冬瓜」「舌」「小便」などの単語の分布は，久米島北部（宇江城，比屋定）と久米島東部（真謝，宇根，泊，謝名堂，比嘉，島尻）では「ス～」と発音され，同じ特徴を持つグループである（図3，図4参照）。

なお，図4の「舌」の地図では，北部の宇江城と比屋定にだけ特殊な語形「チャングワー」が使用されており，この地域も東部とは異なる特徴を有することもわかる。

さらに図3，図4と同じ特徴を持つのが「小便」の言語地図である（図5）。この地図では島尻が「ス～」ではなく，「シ～」になっている。一方，山城は「ス～」になっており，島尻や山城では比嘉や謝名堂との交流によって，「ス～」と「シ～」で揺れ動いている（図3～5を参照）。

なお，図6の「～の／～のは」が「～ヒ」「～へー」になる地図であるが，これは久米島東部の（真謝，宇根，泊，謝名堂，比嘉）にしかみられない特徴である。

### (3) 久米島東部グループの分類（「泥棒」「私」）図7～図8

図3～6で示したグループは，図7「泥棒」の言語地図によって，さらに「比嘉，謝名堂」と東部の「真謝，宇根，泊，謝名堂」に下位区分することができる。活用語のサ行→ハ行の変化は久米島の広い地域で起こる変化であるが，『日葡辞書』などに用例がみられる日本語「ぬすど（盗人）」に対応する語形で，沖縄語の多くの方言では「ヌスドゥ」「ヌスル」であり，「ヌフル」は少数派である。また，図8の「ワヌ」を使用する地域のうち，東部の4集落（真謝，宇根，泊，謝名堂）が図7と重なっており，この地域が似た特徴を持つ方言であることを示している。

### (4) 久米島西部グループと下位区分（「土」「天」「しない」）図9～図11

久米島西部地域で同じ語形を使用しているのが，図9「土（つち）」の語形である。語形から「つち」でなく，「みた」（日本古語の「にた」とつながる語）に遡ることがわかるが，久米島西部では語頭が「み」の語形が使用されている。南側の境界線にあたる儀間，嘉手苅のことはである。儀間以外の集落は久米島町に合併するまでは旧具志川村の集落である<sup>7</sup>。

図10「天（てん）」をみると，久米島西側の中心地である（仲地，西銘，仲泊，大田，兼城）にも共通する特徴があることがわかる。首里王府が編纂した琉球国の祭祀歌謡『おもろさうし』では「天」のことを「てに」と表記している。この西部地域の方言語形「ティンニ」は「てに」が「ティニ」に変化した後で，「～ン～」が挿入されたものであろう。

このような特殊変化によって生じた語形であることや使用範囲が限定されていることも考慮す

7 『久米具志川間切旧日記』によれば「一 仲里間切嘉手苅村具志川間切山城村繰替訴<sub>ニ</sub>付言上乾隆九年子年下日記<sub>ニ</sub>相見得申候」とある。これによれば，乾隆9（西暦1744）年まで，嘉手苅は仲里間切に属しており，繰り替えの訴えによって具志川間切に嘉手苅，仲里間切に山城が属するようになった。



ると、この西部地域内で人々が互いに交流しあっていることが推察される。さらに、図11の「しない」では、この地域が地理的な関係によって、山手側の仲地、西銘と平地の仲泊、大田、兼城に分類できることがわかる。図11をみると「しない」にあたる語形は久米島西部地域を4種類に区分けできることわかる。すなわち、山奥（仲村渠、具志川）では「サン」を使用し、山岳地（仲地、山里）では「ハー」「ハ」、傾斜地～低地（西銘、仲泊、兼城）では「サン」「サー」である。さらに港周辺部（大田、嘉手苺、儀間）である。西部地域の傾斜地から低地（西銘、仲泊、兼城、大田）は、図1の「鎌」の言語地図を参考に分析すると、「西銘、仲泊」「兼城、大田」「嘉手苺」「儀間」に下位分類した方が適していることがわかる。

### (5) 久米島方言の下位区分（「唾」）

「唾」の久米島方言の単語については国立国語研究所の語彙データから表2でとりあげたが、今回の調査地点の4集落に限定されていた。そこで筆者が調査したデータを中心に言語地図を作成したものを掲載する。筆者の調査データでは、真謝方言の「唾」は「トゥンパイ」であるが、「基礎語彙」では「トゥンペー」となっている。真謝方言とほぼ同じ方言である宇根方言でも「トゥンパイ」であることから、本稿の言語地図では「トゥンパイ」で作図を行う。

「唾（つば）」は、久米島方言のなかでも多くの語形を持つ単語の一つである。久米島東部の諸方言と北部地域の諸方言とも、語頭が「トゥ」になる語形（トゥンパイ、トゥンペー、トゥペーなど）が使用されている（地図ではひらがなで表記）。なお、「トゥーツペー」は儀間と嘉手苺でのみ使用が確認された語形で、両方言の影響関係がうかがえる<sup>8</sup>。

なお、久米島西部や北部の一部の方言に分布する「チンペー」「チップエイ」「ツッペー」は首里方言や那覇方言の「チンペー」と同じく「破擦音」の系統である（地図ではカタカナで表記）。

## 3. 2 その他のデータにみる地域差

今回の国立国語研究所の久米島方言調査では4集落の詳しい調査を行ったが、久米島方言の下位区分を考えるためには、より多くの集落の言語データの情報が不可欠である。しかしながら、筆者がこれまでに行った調査は、久米島方言の一部に限られており、調査データが十分にある地点と無い地点がある。そこで、これまでに明らかにされた先行研究の言語データも利用して、久米島方言の言語差を示したものが表7である<sup>9</sup>。

8 図11をもとに、久米島方言を分類すると①（北部：宇江城，比屋定，上阿嘉）③（南部：謝名堂，比嘉，真我里，銭田）⑩（仲地）トゥンペー，②（真謝，宇根，泊）トゥンパイ，④（山城）トゥッパイ，⑤（島尻）トゥンペヘー，⑥（儀間，嘉手苺）トゥーツペー，⑦（大田，兼城）チンペー，⑧（仲泊）チップエイ，⑨（西銘）チンペー，⑪（具志川）ツッペー，⑫（仲村渠）トゥヘー，トゥフェーの12種類に分類できる。

9 表7の資料は西岡・仲原（2010）とその後の補足調査で得られたものが中心であるが、今回の国立国語研究所の「基礎語彙」「文法」の資料から補ったものもある。他に「助詞」のデータを野原（1982），高橋ゼミ（1991）から「ヤモリ」の言語地図，沖縄言語研究センター（1985）から「虹」のデータを補った。なお，鳥島方言のデータは先行研究の論文の例文や語彙資料から補っている。

表7 久米島方言の特徴（分類）

集落名	①代名詞	②助詞	③助詞	④助詞	⑤語末「も」	⑥語頭「み」	⑦語末「み」	⑧特殊単語	⑨語中/s/の対応	⑩語末「ん」
	お前(目下へ)	～へ	～で	～も	蚊「がじゃも」	土「みた」	鉄「はさみ」	鎌「いらな」	盗人「ぬすど」	天「てん」「てに」
宇江城	ヤル	カチ	サーニ／シ	レー	ガジャム	ンチャ	ハサミ	イレーラ	ヌスル	テイントー
比屋定	ヤン	カチ	サーニ	レー	ガジャム	ンチャ	ハサミ	イレーラ	ヌスル	テイントー
上阿嘉	ヤー	(カチ)	(サーニ)	(レー)	ガジャム	ンチャ	ハサミ	イレーラ	ヌスル	テイントー
真謝	ヤー	カチ	チ	ンテー	ガザン	ンチャ	ハサミ	イレーラ	ヌフル	テイン／テイントー
宇根	ヤー	カチ	ー	ー	ガザン	ンツァ	ハサミ	イレーラ	ヌフル	テイン
真泊	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー
泊	ヤー	ー	ー	ー	ガジャム	ンチャ	ハサミ	イレーラ	ヌスル／ヌフル(古)	テイントー
謝名堂	ヤー	ンガティ	チ	ロー	ガジャム	ンチャ	ハサミ	イレーラ	ヌフル	テイントー
奥武島	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー
オーハ島	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー
島尻	ヤー	ンガティ	ー	ロー	ガジャム	ンチャ	ハサミ	イレーラ	ヌスル	テイン
比嘉	ヤー	カチ	チ	ロー	ガジャン	ンチャ	ハサン	イレーラ	ヌスル	テイン
銭田	ツヤー	ー	ー	ー	ガジャン	ンチャ	ハサン	イラナ	ヌスル	テイン
真我里	ヤー	ー	ー	ー	ガジャン	ンチャ	ハサン	イラナ	ヌスル	テイン
山城	ヤー	カティ	サーニ	ロー	ガジャム	ンチャ	ハサミ	イネーラ	ヌスル	テイン
磯間	ヤー	カティ	サーニ	ロー	ガザン	ミチャ	ハサミ	イレーラ	ヌスル	テイン
嘉手苅	ヤー	カチ	サーニ	ッテー	ガザム	ミチャ	ハサミ	イレーラ	ヌスル	テイン
兼城	ヤー	ー	ー	ー	ガザム	ンチャ	ハサミ	イリナ	ヌスル	テイン
大田	ヤー	カティ	サーニ	テー	ガザム	ミチャ	ハサミ	イリナ	ヌスル	テインニ
鳥島	ツウワー／ツワー／ツウエー	ー	ンカー／シニ	ンテー	ガジャン	ンチャ	ー	カマ	ー	テイン
仲泊	ヤン	ー	ー	ー	ガジャン	ミチャ	ハサミ	イラナ	ヌスル	テインニ
上江洲	ヤール	カティ	サーニ	テー	ー	ー	ー	イレナ	ー	ー
西銘	ヤルー	ー	ー	ー	ガジャム	ミチャ	ハサン	イラナ	ヌスル	テインニ
久間地	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	イレーラ／イラナ	ー	ー
山里	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	エレナ	ー	ー
仲地	ヤル	カティ	ー	テー	ガジャム	ミチャ	ハサミ	エレナ	ヌスル	テインニ
具志川	ヤー	カティ	チ	テー	ガジャム	ミチャ	ハサン	エレナ	ヌスル	テイントー
仲村渠	ヤー	ー	ー	テン	ガザム	ミチャ	ハサミ	エレラ／エレナ	ヌスル	テイン
北原	ツヤー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	イラナ	ー	ー
大原	ツヤー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	イラナ	ー	ー

※表の「ー」は「データが見つからない」ことを意味し、今後の補足調査が必要な部分である。  
ただし、奥武島や東奥武島など、話者そのものがみつからない集落、下阿嘉のように話者が高齢化し、調査に耐えられないなどの理由で調査が困難な集落も存在する。

集落名	⑪語末「ん」	⑫特殊単語	⑬特殊語彙	⑭特殊語彙	⑮特殊語形	⑯語頭「し」	⑰語頭「し」	⑱動詞	⑲動詞	⑳形容詞
	銭「ぜに」	唾(つば)	虹「のじ」	家守(やもり)	角「つの」	小便「すへばり」	舌「しば」	する(断定・非過去)	しない(否定)	ひもじい(断定・非過去)
宇江城	ジン	トウンペー	オーナジヤ	ヤールー	クノー	スパイ	チャングワー／シバ	スン	ハン	ヤーハン
比屋定	ジン	チンペー	ニジ	ヤールー	クノー	スパイ	チャングワー	スン	ハン	ヤーハン
上阿嘉	ジン	チンペー	—	—	—	シーバイ	シバ	スン	サン	ヤーハン
下阿嘉	—	—	オンナジャー	—	クノー	—	—	—	—	—
真謝	ジニ	トウンパイ／トウンペー	コンナジ	ヤールー	クヌ	スパイ	スバ	スン	サン	ヤーハン
宇根	ジニ	トウンパイ	コーナジ	ヤールー	クヌ	スパイ	スバ	スン	サン	ヤーハン
真泊	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
泊	ジニ	トウンパイ	—	ヤールー	クヌ	スパイ	スバ	スン	サン	ヤーハン
謝名堂	ジニ	トウンペー	ゴーナジ	ヤールー	クヌ	スパイ	スバ	スン	サン	ヤーハン
奥武島	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
オーハ島	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
島尻	ジン	トウンペヘー	ゴンナジ	ヤールー	クヌ	シーベアー／ユスベアー	スバ	スン	サン	ヤーサン
比嘉	ジン	トウンペー	ゴーナジ	ヤールー	クヌ	スパイ	スバ	スン	サン	ヤーハン
銭田	ジン	トウンペー	—	ヤールー	チヌ	シーバイ	シバ	スン	サン	ヤーサン
真我里	ジン	トウンペー	—	ヤールー	チヌ	シーバイ	シバ	スン	サン	ヤーサン
山城	ジニ	トウツパイ	ゴンナジ	ヤールー	クヌ	スパイ	シバ	スン	サン	ヤーサン
儀間	ジン	トウツペアー	ゴンナジャー	ヤールー	チノー	シーバイ	シバ	スン	ハン	ヤーサン
嘉手苅	ジン	トウツペアー	クンナジャー	ヤールー	チノー	シーバイ	シバ	スー／スン	ハー	ヤーサー
兼城	ジニ	トウツパイ	ゴーナジ	ヤールー	ツイヌ	スパイ	シバ	スン	サン	ヤーサン
大田	ジン	チンペー	ゴーニジ	ヤールー	ツイヌ	シーバイ	シバ	スン	ハー	ヤーサン
鳥島	ジン	トウンペー	ヌジ／ニジ	ヤルマムワー	ツイヌ	シーベアー	シチャ	—	—	—
仲泊	ジン	チツペイ	—	ヤールー	チヌ	シーベイ	シバ	スン	サン	ヤーサン
上江洲	—	—	ニジ	ヤールー	チヌ	—	—	—	—	—
西銘	ジン	チンペイ	ゴーニジ	ヤールー	チヌ	シーベイ	シバ	スン	サン	ヤーサン
久間地	—	—	—	ヤールー	チヌ	—	—	—	—	—
山里	—	—	ゴーナジ	ヤールー	チヌ	—	—	—	—	—
仲地	ジニ	トウツペイ	ゴーナジ	ヤードウー	チヌ	シーベイ	シバ	スー	ハー	ヤーサヌ
具志川	ジニ	ツッペアー	ネージャアー	ヤードウー	チノー	ツッペアー	シバ	スン	サン	ヤーサン
仲村渠	ジニ	トウヘアー	ネージャアー	ヤードウイ	チノー	シバイ	シバ	スン	サン	ヤーサン
北原	—	—	ヌージ	—	チヌ	—	—	—	—	—
大原	—	—	ヌージ／ノージ	—	チヌ	—	—	—	—	—

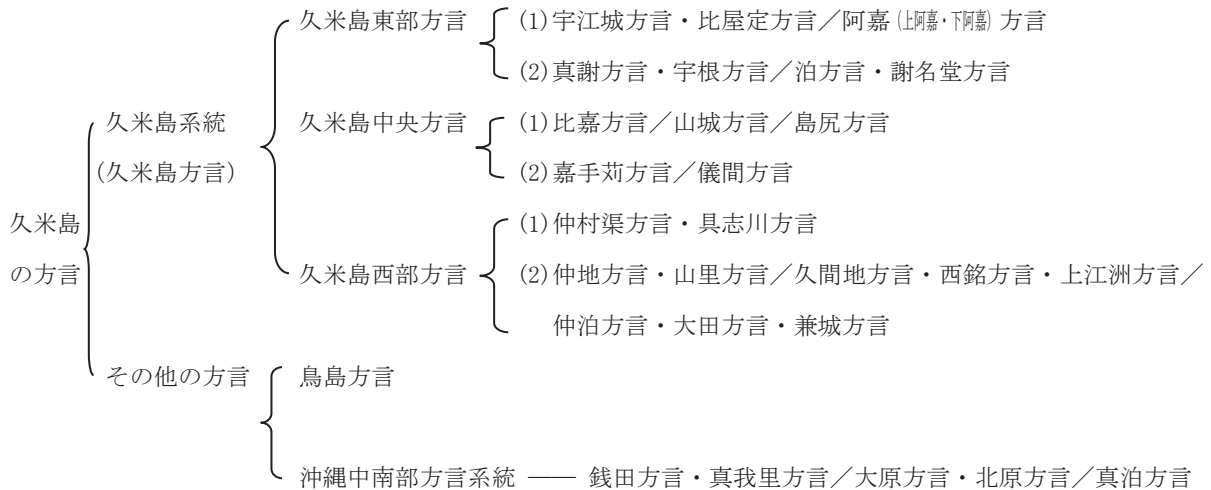
表7は、3.1で示した久米島方言の言語地図では地図化できなかった地点の語形が入っているため、3.1で地図化したデータが入っていない「久米島系」の「下阿嘉」「久間地」「山里」や「その他」に属する「鳥島」「北原」「大原」の分類はできそうである。なお、表7のうち、「真泊」「奥武島」「オーハ島」のデータは管見ではみつからなかった。この表7から、集落間の言語の親近性についてまとめたものを表8として挙げた。

表8 久米島の集落間の言語の親近性

番号	単語(辞)	宇江城	比屋定	上阿嘉	下阿嘉	真謝	宇根	泊	謝名堂	鳥尻	比嘉	銭田	真我里	山城	儀間	嘉手苅	兼城	大田	鳥島	仲泊	上江洲	西銘	久間地	山里	仲地	具志川	仲村渠	北原	大原	備考		
①	お前	○	○																		○	○			○				ヤ(-)ル(-)で目下の意になる。			
②	～へ													○	○			○							○	○				カテイを使用		
③	～へ	○	○		○	○	○									○														カチを使用		
④	～で					○			○																	○				チを使用		
⑤	～も	○	○																											レーを使用		
④	～も								○	○	○			○	○															ローを使用		
⑤	蚊	○	○	○				○	○	○				○			○	○	○			○			○	○	○			ガジャム/ガザムを使用する地域		
⑥	土														○	○		○		○		○			○	○	○			ミチャを使用		
⑦	鉄										○	○	○									○								ハサンを使用		
⑧	鎌	○	○	○		○	○	○	○	○																				イレラを使用		
⑨	鎌											○	○								○	○						○	○	イラナを使用		
⑧	鎌														○	○														イレナを使用		
⑧	鎌																○	○												イリナを使用		
⑧	鎌																							○	○	○	○			エレナを使用		
⑩	泥棒					○	○	○	○																						ヌフルを使用	
⑪	天 <small>テ</small>																	○		○		○			○					テニニを使用		
⑫	銭 <small>ゼ</small>					○	○	○	○									○								○	○	○			ジニを使用	
⑬	唾	○				○			○		○	○	○																		トゥンペーを使用	
⑭	虹	○	○																												オーナジャ(-)を使用	
⑮	虹								○		○							○							○	○					ゴーナジを使用	
⑯	虹									○																					ゴンナジを使用	
⑰	虹																		○			○									ゴーニジを使用	
⑱	ヤ <small>ヤ</small>																			○											ヤルムムワーを使用	
⑲	角	○	○		○																										クノーを使用	
⑲	角					○	○	○	○	○	○			○																	クヌを使用	
⑲	角														○	○															チノーを使用	
⑲	小便	○	○			○	○	○	○		○			○																	スパイを使用	
⑲	小便																			○		○			○						シーベイを使用	
⑲	舌	○	○																												チャングワーを使用	
⑲	舌					○	○	○	○	○	○																					スバを使用
21	動詞																								○						語末「ン」が脱落し、長音化する。	
22	動詞	○	○												○	○			○						○						「しない」の意で「ハン」「ハー」を使用	
23	形容詞	○	○	○		○	○	○	○	○																					ヤーハン(ひもじい)を使用	

### 3. 3 久米島の方言区画

3. 1の久米島方言の言語地図、3. 2の表7、表8により、久米島の方言を以下のように分類することができる。



久米島の方言は「久米島系統（久米島方言）」と「その他の方言」に大別される。ここまではほとんどの研究者もさほど異論はないと思われる。問題は下位区分である。

「久米島系統」の言語を今回は3つに分類（東部・中央・西部）する案を提示した。久米島北部は山手であり、南部の平地に暮らす人々との交流はそれほど行われていない。また、東部と西部とは間に山があるため、車を利用してもすぐには行き来できない。このような地理的な条件を持つ久米島方言は単語ごとにさまざまな分布を示す。このことが久米島方言に中央方言を設けた理由である。中央部の嘉手苺・儀間、山城・比嘉・島尻は東部方言とも西部方言にも似た特徴を持っている。

一方、「その他の方言」には「国頭語」（沖縄島北部方言，与論・沖永良部方言，喜界島）系統とみられる「鳥島方言」のほか、沖縄本島（那覇系）からの移住集落である「錢田」「真我里」，開墾のために沖縄本島（中部地域）から入植したとされる「大原」（後に北部地域が「北原」になる），糸満の漁師らで作ったとされる「真泊」の各集落のことばが属している。特に「真泊」は魚名のデータ以外はデータがなく、今回は全く分析できなかったが、現在も話者になり得る人々が生活しているため、区画にも入れておいた。その一方で渡名喜島など周辺の島からの移住者が住んでいたといわれるオーハ島や沖縄本島からの入植した人が住んでいたといわれる奥武島は、現在話者を探ることができないため、今回の方言区画から省いている。

## 4 おわりに

本稿は久米島で使用される方言の下位区分として、言語地図とわずかな資料を頼りに方言区画を行った。久米島方言の特徴を概観し、久米島方言の下位分類を行う、という目標はたどり着く

ことができた。

久米島方言はこれまであまり注目されず、限られた集落しか調査データが残っていない。そのため、今回の久米島方言調査にて得られた4地点のデータは非常に貴重な記録である。しかしながら、それでも久米島方言の全体像を探るには十分とはいえない。語彙も文法も補足調査が必要である。

さらに約30地点の集落のなかには、データがほとんどない集落もあり、今後取り組むべき課題が多く見つかる調査にもなった。今後、一層の努力を持って久米島方言の記録・保存、次世代への継承に取り組んでいきたい。

## 参考文献

- 池間恵理子・前田舟子・岡田奈央美 (2011) 「島尻方言の動詞」『琉球方言研究』創刊号特集 久米島方言 (琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室)
- 上村幸雄 (1992) 「琉球列島の言語 (総説)」『言語学大辞典』第4巻 (三省堂)
- 内間直仁 (1969) 「沖縄久米島仲里村儀間方言の音韻体系」『都立大論集』第8号 (東京都立大学国語国文学会)
- 内間直仁 (1981a) 「久米島鳥島方言の文法」『琉球の方言6号—久米島鳥島—』(法政大学沖縄文化研究所)
- 内間直仁 (1981b) 「久米島仲里村儀間方言の文法」『琉球の方言6号—久米島鳥島—』(法政大学沖縄文化研究所)
- 内間直仁・野原三義 (2006) 『沖縄語辞典—那覇方言を中心に—』(研究社)
- 沖縄久米島調査委員会 (1983) 『沖縄久米島 資料編—「沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究」』(弘文堂)
- 沖縄言語研究センター (1985) 『久米島方言全集落調査』(「琉球列島の言語の記録保存」久米島 (仲里村, 具志川村) 方言全集落調査)《検討用資料》
- 生塩睦子 (1984) 「沖縄諸島 (属島) の方言」『講座方言学10—沖縄・奄美地方の方言—』(国書刊行会)
- 嘉味田宗栄 (1962a) 「真謝・首里方言と標準日本語—比較考察の地ならしの一例として— (その1)」『沖縄文化』第6号 (沖縄文化協会)
- 嘉味田宗栄 (1962b) 「真謝・首里方言と標準日本語—比較考察の地ならしの一例として— (その2)」『沖縄文化』第7号 (沖縄文化協会)
- かりまたしげひさ (2015) 「硫黄島方言の簡易文法記述—名詞の格—」『琉球諸語 記述文法I』(消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究 [代表: 狩俣繁久])
- 国立国語研究所 (1963) 『沖縄語辞典』(大蔵省出版局)
- 平良美由紀・當山奈那 (2011) 「山城方言の動詞」『琉球方言研究』創刊号特集 久米島方言 (琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室)
- 高橋ゼミ (1991) 『沖縄方言研究 第11号—久米島方言の言語地理学的研究—』(沖縄国際大学 高橋ゼミ報告書)
- 高橋ユキ (2011) 「久米島方言の名詞」『琉球方言研究』創刊号特集 久米島方言 (琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室)
- 高橋ユキ・砂辺祥子・山川麻里 (2011) 「比屋定方言の動詞」『琉球方言研究』創刊号特集 久米島方言 (琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室)
- 武永睦子 (1966) 「沖縄久米島真謝方言の程度副詞」『方言研究年報』第9号
- 知念桃子・當銘千怜・松岡美里 (2011) 「嘉手苺方言の動詞」『琉球方言研究』創刊号特集 久米島方言 (琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室)
- 津波古敏子 (1992) 「琉球列島の言語 (沖縄中南部方言)」『言語学大辞典』第4巻 (三省堂)
- 津波古敏子 (2001) 「硫黄島方言の音韻—久米島具志川村鳥島の方言—」真田信治[編]『日本語の消滅に瀕した

- 方言に関する調査研究』(A4-001)(文科省特定領域研究)
- 津波古敏子(2009)「第五章 硫黄島方言の諸相—硫黄島方言はどの方言圏に属するか」『鳥島移住百周年記念誌』字島島移住百周年記念事業実行委員会
- 仲原 穰(1999a)「沖縄久米島真謝方言における親族語彙」『琉球方言音韻・文法・語彙の研究—周辺諸方言との比較研究も含めて〈その1〉』(千葉大学大学院社会文化科学研究科プロジェクト報告書 第2集)
- 仲原 穰(1999b)「沖縄久米島真謝方言の音韻研究」『沖縄文化』通巻90号(沖縄文化協会)
- 仲原 穰(2001)「久米島真謝方言の助詞」『琉球方言音韻・文法・語彙の研究—周辺諸方言との比較研究も含めて〈その2〉』(千葉大学大学院社会文化科学研究科プロジェクト報告書 第3集)
- 仲原 穰(2002)「沖縄久米島嘉手苺方言の音韻」『社会文化科学研究』6号(千葉大学大学院社会文化科学研究科)
- 仲原 穰(2003)「久米島真謝方言の音韻対応」『日中両言語における代名詞及び親族語彙の対照研究—琉球方言との比較研究も含めて—』(千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書)
- 仲原 穰(2004)「久米島真謝方言動詞の活用」『琉球の方言』28号(法政大学沖縄文化研究所)
- 仲原 穰(2006)「久米島真謝方言の名詞のアクセント—「類別語彙」1・2音節名詞を中心に」『琉球の方言』30号(法政大学沖縄文化研究所)
- 仲原 穰(2014)「沖縄県久米島方言」『文化庁委託事業 危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究(八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言)報告書』(国立大学法人琉球大学国際沖縄研究所)
- 仲原 穰(2016)「久米島真謝方言の簡易文法 一名詞の格—」『琉球諸語 記述文法Ⅱ』(消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究[代表:狩俣繁久])
- 西岡敏・仲原穰(2010)「久米島の言語地図にみる地域性—中間報告—」『久米島調査報告書(2)—地域研究シリーズNo.37』(沖縄国際大学南島文化研究所)
- 仲宗根政善(1987)[1960]「沖縄方言の動詞の活用」(『琉球方言の研究』,新泉社)
- 名嘉真三成(1980)「久米島真謝方言の音韻」『沖縄久米島における言語・文化・社会の総合的研究(中間報告)』(法政大学沖縄文化研究所)
- 名嘉真三成(1982)「久米島真謝方言の音韻」『沖縄久米島』(弘文堂)
- 名嘉真三成(1992)「音韻の記述的研究 9.具志川村西銘方言」『琉球方言の古層』(第一書房)
- 中本正智(1981a)「鳥島方言の語彙」『琉球の方言6号—久米島鳥島—』(法政大学沖縄文化研究所)
- 中本正智(1981b)『図説 琉球語辞典』(金鶏社)
- 中本正智(1982)「沖縄久米島における国語教育」『沖縄久米島』(弘文堂)
- 中本正智(1990)『日本列島言語史の研究』(大修館書店)
- 波平憲一郎(2004)『久米島町字儀間 しまくとぅば辞典』(自家出版物)
- 西岡敏・仲原穰(2010)「久米島の言語地図にみる地域性—中間報告—」『久米島調査報告書(2)』地域研究シリーズNo.37(沖縄国際大学南島文化研究所)
- 日本放送協会編(1972)「3 具志川村仲泊(久米島)」『全国方言資料』第11巻琉球編Ⅱ(日本放送出版協会)
- 野原三義(1982)「久米島具志川村鳥島方言の文例」『琉球の方言6号—久米島鳥島—』(法政大学沖縄文化研究所)
- 野原三義(1982)「久米島方言の助詞」『沖縄久米島』(弘文堂)
- 野原三義(1985)「久米島仲里村真謝方言の助詞・助動詞」(『琉球の方言』第9号,法政大学沖縄文化研究所)
- 野原三義(1986)『琉球方言助詞の研究』(武蔵野書院)
- 平山輝男・大島一郎・中本正智(1966)『琉球方言の総合的研究』(明治書院)
- 藤原敬治(1982)「久米島方言の音韻—西銘方言を中心に—」『沖縄久米島』(弘文堂)
- 宮平飛鳥(2011)「久米島紬と方言」『琉球方言研究』創刊号特集 久米島方言(琉球大学法文学部国際言語文化学科学球方言研究室)
- 屋比久浩(1982)「久米島方言の動詞・形容詞の構造について」『沖縄久米島』(弘文堂)

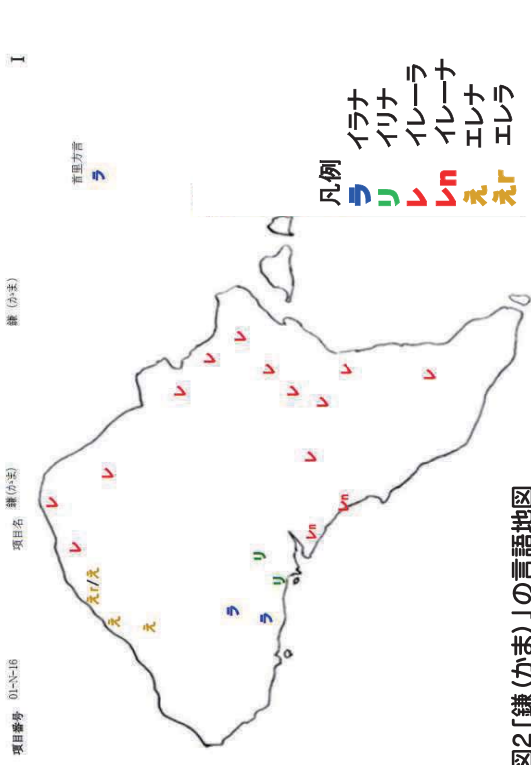


図2「鎌(かま)」の言語地図

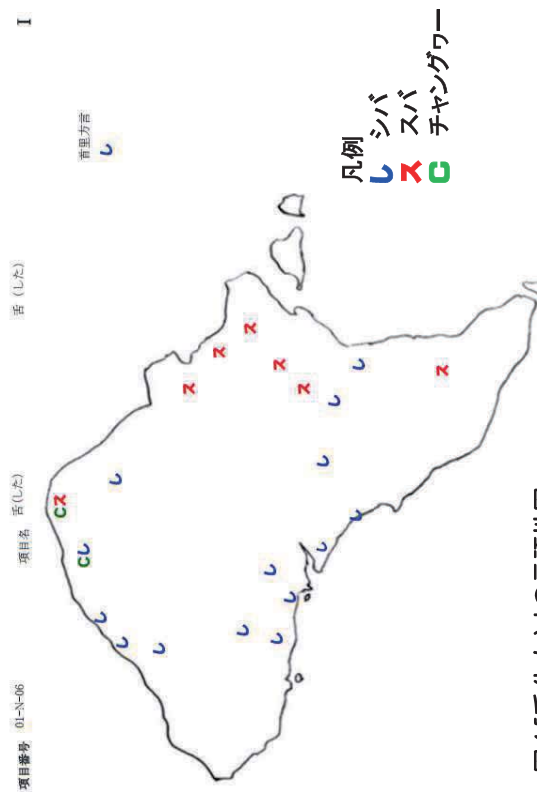


図4「舌(した)」の言語地図



図1 久米島言語地図 調査地点

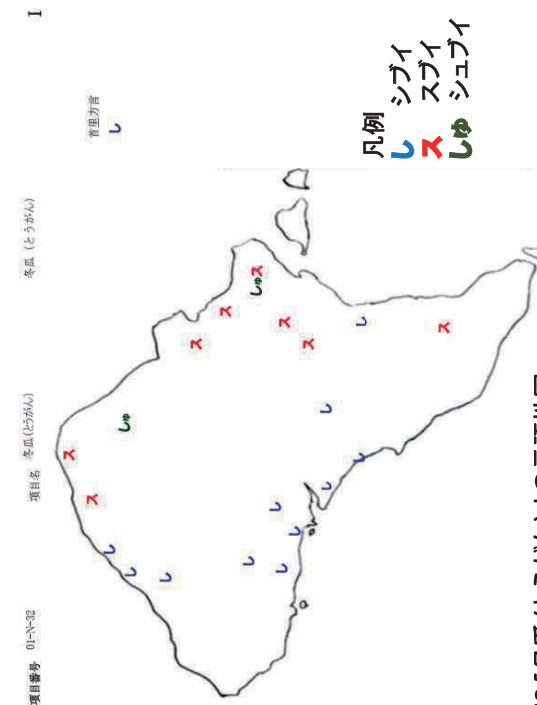


図3「冬瓜(とうがん)」の言語地図



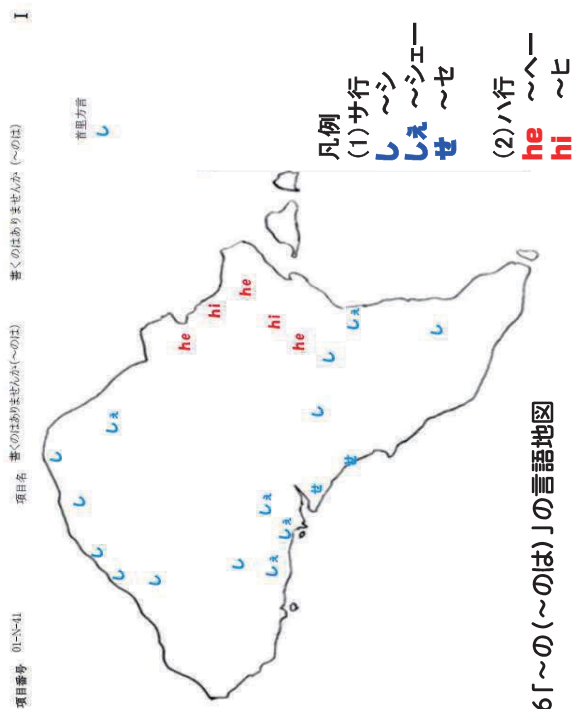


図6「〜のは)」の言語地図

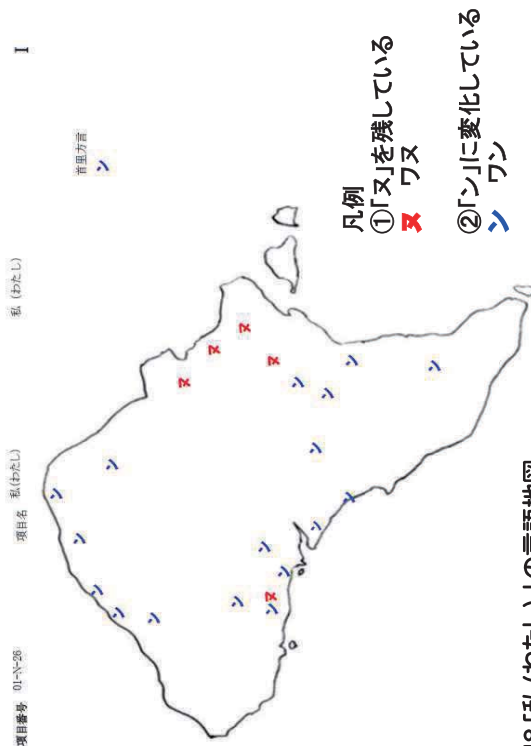


図8「私(わたし)」の言語地図

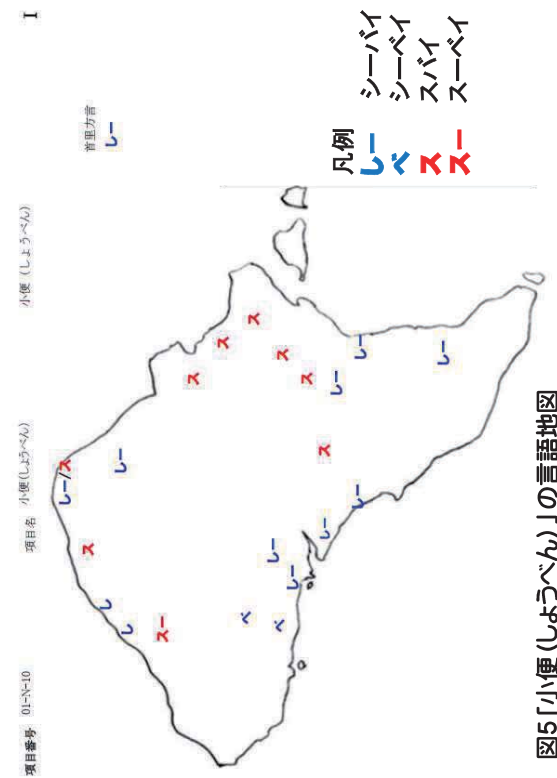


図5「小便(しょうべん)」の言語地図

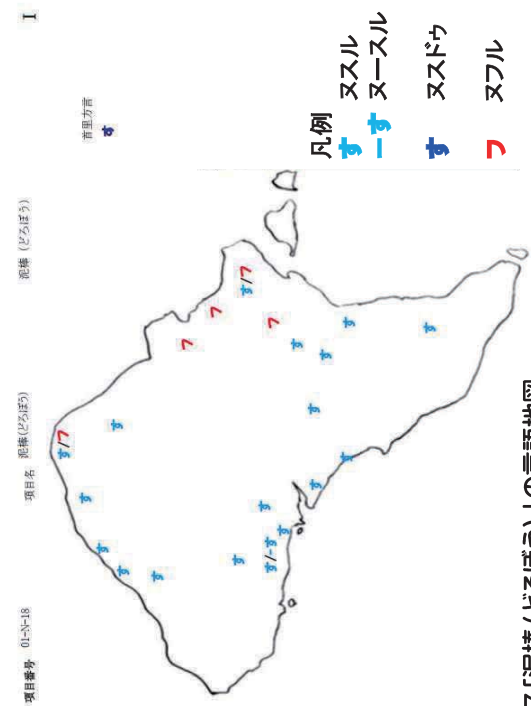


図7「泥棒(どろぼう)」の言語地図

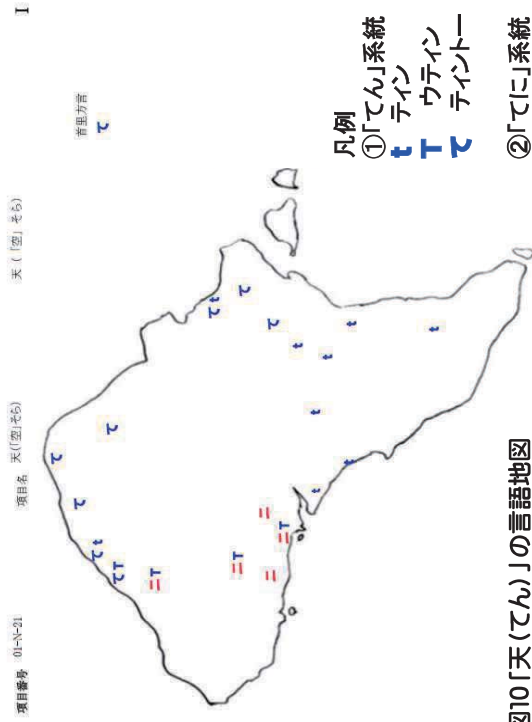


図10「天(てん)」の言語地図

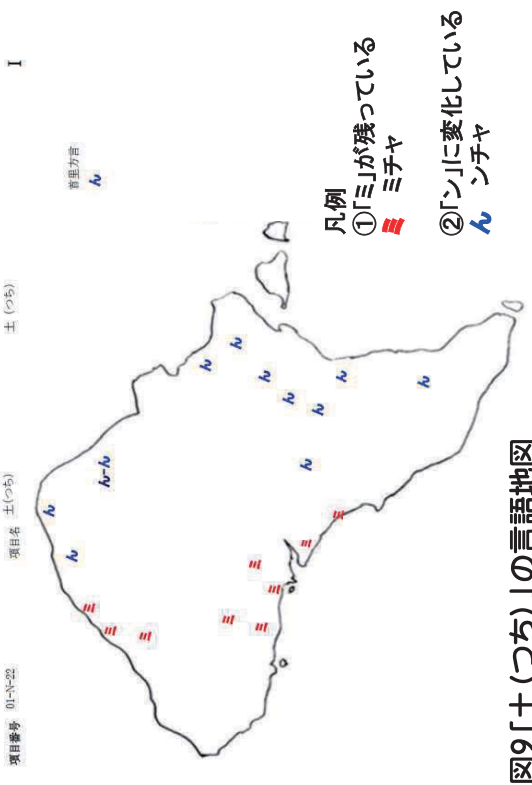


図9「土(つち)」の言語地図



図12「唾(つば)」の言語地図

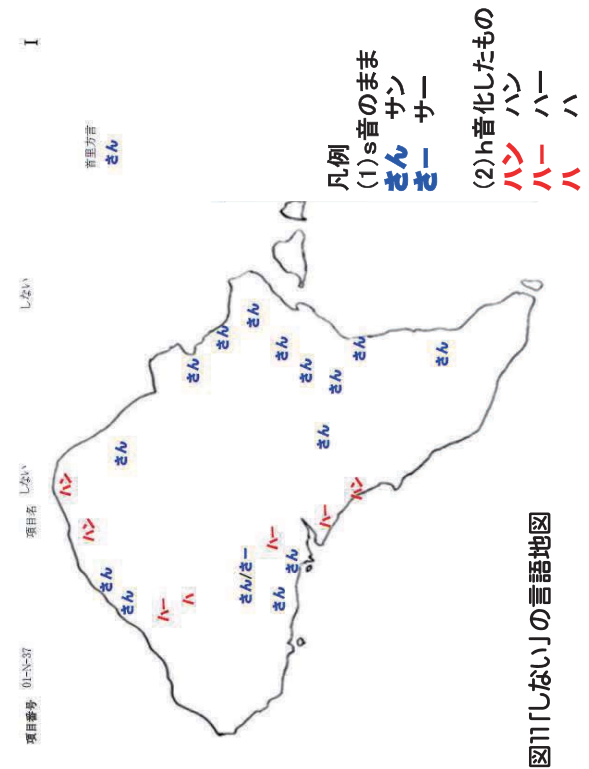


図11「しない」の言語地図